

[論 文]

## ナチ時代の公共図書館における子どもの読書 —Die Bücherei 誌の分析を中心に—

まつい けん  
松井 健人

(東京大学大学院)

### 抄録

本稿は、ナチ時代の図書館において、子どもの読書に対してどのような意義が見出され、どのような読書が行われたのかを解明する。この課題に答える格好の史料となるのが、帝国民衆図書館局発刊の専門機関紙『ディー・ビューヘライ』(Die Bücherei)である。本誌の経年的な分析の結果、以下の三点が明らかとなった。(1) ナチ党員の著作や第一次世界大戦の著作を初めとした、ナチ・イデオロギーに親和的な図書の読書が推奨された。(2) 子どもの読書にかかわる図書館活動においては、集団での読書・朗読が重視されていた。(3) 図書館建築において、前述の集団での読書・朗読を可能にする図書館の空間が重視されていた。

### 1. はじめに

本稿は、ナチ時代の公共図書館において、子ども<sup>1)</sup>の読書の意義がいかなるものとして認識されていたのか、そして子どもの読書がどのように図書館で行われていたのかを、読書の方法や読書を行う空間に着目して明らかにすることを目的とするものである。

本稿がとくに図書館という具体的対象を設定した理由は以下のとおり二つある。まず一点目に、ドイツにおいて19世紀初頭以降に設立が進んだ公共図書館(Öffentliche Bibliothek)<sup>2)</sup>が、子どもに読書の機会を与える格好の「読書装置＝読書供給所」であったという点である<sup>3)</sup>。さらに二点目として、その図書館が、社会教育・民衆教育施設としての性格を持ち、積極

的に教育に携わる機関であったことが理由として挙げられる<sup>4)</sup>。図書館は、子どもに読書の機会を提供する社会教育施設としての役割を歴史的に担ってきたのである。

次に、本稿が分析の対象とする、子どもの読書の歴史的意義について述べたい。ドイツ文化史において、子どもの読書は一つの重要な課題であり、狭義の学校教育のみならず、法制定や家庭教育といった様々な局面において、子どもの読書の意義に関する議論が盛んに行われた。ナチ時代においても、子どもの読書は一つの大きな問題であった。具体的に、ナチ時代における子どもの読書に関しては、狭義の図書館史研究に限らずナチ研究において、数多くの研究がなされてきた。ただしこれらの研究の大半は、子どもが「何を」読んでいたのかを明らかにする書誌的考察であった<sup>5)</sup>。先行研究においては、ナチ時代の子ども読書は、ナチスによるプロパガンダ・宣伝の手段といった文脈で理解されてきた<sup>6)</sup>。しかしながら、ナチ時代の子ども読書行為の意義あるいは読書の方法や読書空間に着目する研究は、これまでほとんどなされてこなかった。

上述のような研究状況の中で、子どもの読書の方法に着目する例外的な研究として、ノルベルト・ホプスターの研究を挙げることができる<sup>7)</sup>。ホプスターの研究は、子どもの読書において、「朗読」(Vorlesen)という読書行為がナチ時代において重視された点を指摘したが、あくまでその存在を言及するにとどまり、考察の対象とはなっていない。

従来の図書館史研究においても、ナチ時代において子どもの読書がナチ・イデオロギー教化の手段の一つであったと捉えた上で、前述のような「何が読まれたのか」を扱う書誌的考察に重きを置くものが多かった<sup>8)</sup>。図書館における子どもの読書を対象とした研究としては、ビルギット・ダンケルトによるナチ時代の子ども図書館の研究がある<sup>9)</sup>。ダンケルトによれば、ナチ時代の図書館は、学校と家庭の外部として解放された場所であるかのような、偽の自由(Pseudofreiheit)の場所としてあった。これは、ナチズムとくにヒトラー・ユーゲントとの協力を強えられることによって、図書館組織は囲い込まれてしまったことを意味する<sup>10)</sup>。しかしながら、ダンケルトの研究は当時の図書館界における子どもの読書への理解、および読書のあり方に関しては考察が向けられていない。

こうした研究状況に鑑みると、図書館界において、図書館関係者らが子どもの読書に対してどのような意義をあたえ、その理解の上になど

読書が行われたのかは、ナチ時代にかかわる図書館史研究において解明されるべき検討課題である。本稿はそうした試みとして、ナチ時代の図書館において、子どもの読書に対してどのような意義が見出され、その意義と共にどのような読書が行われたのかを明らかにする。また、子どもの読書と図書館での読書行為・図書館の空間との関わりについて考察する本稿は、図書館史研究において近年着目されつつある、物理的な図書館の場所・空間を分析する「場としての図書館」に関する議論<sup>11)</sup>に対して、一つの歴史的参照点を提供することができるだろう。

以下においては、まず本稿で用いる史料である『ディー・ビューヘライ』誌の歴史的背景と特徴について述べる（第2節）。次いで、『ディー・ビューヘライ』において展開された子どもの読書に対する意義づけのありさまをみる（第3節）。そして、その意義づけに基づいて、どのような読書が行われたのかを、とくに図書館空間との関わりに着目して明らかにする（第4節）。第二次世界大戦中の図書館における子どもの読書の意義づけの変化とその結末をみた（第5節）のちに、結語的考察を行う。

## 2. 『ディー・ビューヘライ』誌の成立とその性格

ナチ時代における子どもの読書に対する意義づけを明らかにし、読書との結びつきについて考察する本稿の課題に答える格好の史料となるのが、当時の図書館専門誌である、帝国民衆図書館局（Reichsstelle für volkstümliches Büchereiwesen）発刊の専門誌『ディー・ビューヘライ』（*Die Bücherei*）である。『ディー・ビューヘライ』は、1934年から1944年まで基本的には月刊で刊行され、毎号40～50頁程度であった。この『ディー・ビューヘライ』は、ナチ時代以前の専門誌二誌『図書館と教育事業』（*Bücherei und Bildungspflege*）と『図書館雑誌』（*Hefte für Büchereiwesen*）を統合して創刊された。『ディー・ビューヘライ』の発行母体である帝国民衆図書館局は、帝国学術・教育・民衆教育省（Reichsministerium für Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung）の下部組織であった。この帝国民衆図書館局は、ナチ時代において都市および農村の民衆図書館の蔵書構成の監視や『ディー・ビューヘライ』刊行といった役割を担った。それゆえ、帝国民衆図書館局は、第三帝国の図書館行政の中心的な機関であったといえる<sup>12)</sup>。『ディー・ビューヘライ』編集者の一人であるヴィルヘルム・シュスターが『図書館と教育事業』の最終号で、『ディー・ビューヘライ』創刊

の目的を、図書館が「国家社会主義的な民族発展のための道具」として資することにあると述べたように<sup>13)</sup>、上述の創刊経緯を持つ『ディー・ビューヘライ』は、ナチ時代の図書館界を代表する専門誌として位置づけられる<sup>14)</sup>。『ディー・ビューヘライ』に関しては、帝国民衆図書館局長官を務めたフランツ・シュリーヴァーあるいは先述のシュスターの読書観・教育観が明らかにされているものの、実際にどのような子どもの読書が行われていたのかは明らかにされていない<sup>15)</sup>。

『ディー・ビューヘライ』誌の内容構成に関しては、基本的に巻頭言、論考、実践報告、書評の順の構成で刊行された。この『ディー・ビューヘライ』の内容は、選書論・図書館建築設計・図書館に関する時評と多岐にわたるが、実践報告の多くが、本稿でも取り上げるヒトラー・ユーゲントと図書館の協力活動あるいは新設図書館に関わるものであった点が特徴的である。『ディー・ビューヘライ』への投稿者は、本稿で取り上げる帝国学術・教育・民衆教育省専門調査官ハインツ・デーニハルトに代表されるような図書館行政関係者だけではなく、図書館学研究者や各地の学術図書館・民衆図書館・学校図書館らの職員といった図書館に関わる広範な人々であった。

本稿では、『ディー・ビューヘライ』の全体を考察の対象に含めるが、とくに本稿の主題と関わるのは、子どもの読書の意義についての見解が言及されることの多い論考と、現職図書館職員が投稿することの多い実践報告である。

なお、ナチ時代の図書館機構に関する史料の残存状況に関しては、大戦末期に起きたライプツィヒ空襲によって、図書館行政に関係する中央政府文書が焼失したため、史料的困難がある<sup>16)</sup>。このような史料状況の中で、『ディー・ビューヘライ』では、全国からの図書館活動の報告が一貫して掲載され、さらに子どもの読書に関する論考と報告も掲載されている。つまり、ナチ時代において、子どもの読書に対する思考のあり方は、『ディー・ビューヘライ』を分析することによって可能となる。『ディー・ビューヘライ』の論考・報告が、子どもの読書のありのままの姿を伝えるものではないが、しかし、ナチ時代において望まれた子どもの読書像を伝えるものである。このような点で、ナチ時代において展開された子どもの読書に関する意義づけとその実践を明らかにするためには、『ディー・ビューヘライ』はふさわしい分析対象であるといえる。

### 3. 『ディー・ビューヘライ』誌における子どもの読書への意義づけ

本節では、『ディー・ビューヘライ』において、子どもの読書がどのように認識されていたのかを明らかにする。ナチ時代の図書館において、子どもの読書において何が重要視されていたのか。例えば、フランクフルト・オーダー市立図書館職員のエリック・ウィルケンスは、以下のように、図書館で開催されたヒトラー・ユーゲントのための朗読会 (Vorlesestunden) についての報告を行う。その中で、子どもの読書に対して求められたものが明らかになる。

〔ヒトラー・ユーゲントのための朗読会の成功のためには〕朗読する書物の用意周到な配置と、集会の外面の見栄えは、決して、自己目的となってはならない。そうでなくて、これらは目的のための手段である。目的とは心的体験 (seelisches Erlebnis) でなくてはならない。その結果、日々の生活を鼓舞し、精神的認識を実り豊かなものにするのだ<sup>17)</sup>。

ここでは、読書は体験 (Erlebnis) を得るための手段として理解されている<sup>18)</sup>。そして、この手段とは、図書館にヒトラー・ユーゲントが集まり、書物を朗読することによって達成される。この朗読会は図書館側だけではなく、ヒトラー・ユーゲントにとっても重要なものであった。とくに、ヒトラー・ユーゲントがおこなう夕べの集いにおいて朗読が重要視される。たとえば、ベルリンでの子ども図書館の開館式の報告では、以下のように子どもの読書の在り方が示される。

書物は夕べの集いにおいてもはや無視できないものである。そして、いかなる集いも式典も、体験形成の手段としての書物 (Buch als Mittel der Erlebnisgestaltung) を断念することはできない。重要なものは、政治的書物である。〔中略〕教育はヒトラー・ユーゲントの指導者の手によって決定されるので、読者は教育的意味での「成熟」(Reife) を問われることは無い<sup>19)</sup>。

すなわち、読書内容や読書行為の意義づけを決定したのは、あくまで子供ではなく、ユーゲントの指導者であった。また、読書を行うのは子どもであるにもかかわらず、その子どもの教育的意味での「成熟」(Reife)、つ

まり読書にあたっての子ども自身の能力は問われることがなかった。そして、読書の内容、何を読むかにあたっては、ナチ的図書の読書を推進することが追い求められたのであった。同様の主張は、実践報告だけでなく、論考においても展開される。たとえば、地方文化行政担当官による論考において、以下のように主張がなされる。「ヒトラー・ユーゲントと公共図書館との協力は最も高次の目標としておかれ、子どもと図書館は然るべく、読書の要求の計画的な操作によって関係づけられなければならない」のである<sup>20)</sup>。

次に、シュナイデンミュール市立民衆図書館におけるヒトラー・ユーゲントと図書館の協力に関するリヒャルト・コックの報告をみる。ヒトラー・ユーゲントと図書館の取り組みの結果として、以下のカテゴリー<sup>21)</sup>(表I)の図書貸出がなされたことが、協力の取り組みの成果として報告される。この貸出記録に対してコックは以下のように述べる。

この喜ばしい結果は、偶然ではないし、子どもからの読書の希望によるものだけでもない。そうでなく、計画だった指導と、これらの書物群へと子どもを方向付けたことにある。これは、地域のヒトラー・ユーゲントとの協力で、多くの適切な書物の準備によって可能となったものである<sup>22)</sup>。

表I シュナイデンミュール市立民衆図書館の貸出(1936年4月～1937年3月)<sup>23)</sup>

	全体の貸出冊数	HJの貸出冊数	HJの割合(%)
ナチズム	2191	1802	82.2
〔第一次〕世界大戦	5036	3446	68.4
新ドイツ国防軍	2468	2232	90.4
ドイツの航空機	599	493	82.3
スポーツ・肉体鍛錬	579	452	78.1

(HJはヒトラー・ユーゲント)

上の表Iのカテゴリーに示されるように、ヒトラー・ユーゲントとの協力によって目指されるべき政治的読書とは、すなわちナチ・イデオロギー的な図書、あるいは軍事的な図書の読書であった。このようなナチ的な読書観は、『ディー・ビューヘライ』誌面では、ナチ的図書の推奨だけではなく、

一般市場にあふれる無価値(wertlos)な図書への批判としても展開される<sup>24)</sup>。『ディー・ビューヘライ』において展開される望ましい読書行為を通じて目指される人間像は、ナチ革命の担い手であり、政治的人間として教育された青年であった<sup>25)</sup>。

これまで見てきたような、『ディー・ビューヘライ』において展開された子どもの読書の意義に関わる言説を踏まえると、子どもの読書は「体験」を得ることが目的として設定され、書物は「体験形成の手段」として重視されていたことがわかる。既にみたように、『ディー・ビューヘライ』に繰り返し登場するキーワードとして、「体験」を指摘することができる。この言葉は子どもの読書の目標として提示され、子どもは指導者によって選ばれた政治的書物を読み、体験を得てナチ・イデオロギーに沿う思想をもつことが目標とされたのであった。

子どもの読書の意義とは、読書が「心的体験」を始めとした「体験形成の手段」にある点に集約される。では、この読書への意義づけに基づいて、どのような読書が図書館で行われることになったのか。次節でこの点に着目する。

#### 4. 『ディー・ビューヘライ』誌における子どもの読書

前節は子どもの読書の意義を明らかにしたが、本項では読書の実践、つまり「どのように」読書をすることが目指されたのかを明らかにする。

子どもの読書に関して、『ディー・ビューヘライ』誌上で支配的な言説は、読書と共同体とを結び付けるものであった。たとえば、図書館職員でありながら1933年に焚書に参加したことで有名なフリッツ・ハイリゲンシュテットは以下のように述べる。

書物は、個人による読書といった、共同体を分裂させるような(gemeinschaftssprengend)要素ではなく、朗読あるいは集団での読書を通しての、共同体を形成する力として示されるものである。国民社会主義的教育に資する貢献を行うためには、学校図書館の課題と本質は、とくに「子ども」と「書物」という二つの支柱にあることが自覚されることが必要である<sup>26)</sup>。

彼によれば、書物は、朗読あるいは集団での読書を通して「共同体を形成する」ものとして読まれるべきであるとされる。これに対して個人によ

る読書は、共同体分裂に導きうるものとして捉えられる。

『ディー・ビューヘライ』では、書物を共同体形成・民族形成にかかわるものとして捉える言説が数多く展開される。上の引用がしめすように、読書行為は、国民の力の源泉、あるいは民族共同体（Volksgemeinschaft）形成の要因の一つとして捉えられた<sup>27)</sup>。

共同体と読書行為を結び付ける思考は、このように個人による読書を敵視し、朗読を始めとした共同的な形で行われる読書を推奨する。先のシュナイデンミュール市立民衆図書館の報告でも、読書に関する基本的な区別が提唱される。つまり、「個人の私的な読書」と「教育の達成のための政治的読書」との二区分が基本的な読書の類型として示される<sup>28)</sup>。ヒトラー・ユーゲントと図書館の協力によって目指すべきは、後者の政治的読書である。

では、実際にどのように、朗読が行われたのか。前項でみたフランクフルト・オーダーの市立図書館のヒトラー・ユーゲントのための朗読会を再び取り上げる。「兵士 義務と榮譽」との題目の下、以下のような朗読会のプログラムが実施された<sup>29)</sup>。「1 カール・リッツマン<sup>30)</sup>『プロイセンの母』(Eine preußische Mutter) (2分)、2 ハンス・フランク<sup>31)</sup>『王の決闘』(Das Königsduell) (10分)、3 ハンス・グリム<sup>32)</sup>『陸軍少尉とホッテントット<sup>33)</sup>』(Der Leutnant und der Hottentott) (40分)、4 プログラム1の中の一節の繰り返し (1分)」。

ハンス・グリムのように、いずれもナチスに親和的な人物の著作が選ばれ、ヒトラー・ユーゲントに向けて朗読がなされたのであった。つまり、ヒトラー・ユーゲントと協力し、図書館において、ナチスに親和的な書物を集団で読んでいた、あるいは朗読していたことがわかる。とはいえ、単にナチ的な書物を朗読すればよいわけではなく、朗読にふさわしい書物の選定、あるいは朗読する書物の組み合わせへの苦慮も報告の中で表明される<sup>34)</sup>。

では、読書は、図書館においてどのように展開されたのか。ここで、『ディー・ビューヘライ』の発行元である帝国民衆図書館局が1943年に刊行した『ドイツの図書館』をみる。『ドイツの図書館』は、帝国民衆図書館局がこれまでの図書館の新設を記念し、ドイツの図書館の「有るべき姿を示すため」に出版した、図書館建築写真集である<sup>35)</sup>。それゆえ、本書には、ナチ時代において模範とされた図書館建築のあり様が示されているとあってよい。『ドイツの図書館』は、冒頭において、図書館における子どもの読書について以下のように述べる。

民族全体における子どもの存在の重要性を考えれば、図書館建築において、子どもの読書に関わる設備 (Jugend- und Kinderleseeinrichtungen) をつくり出すことは極めて重要である。書かれた言葉 (gedrucktes Wort) を民族の生命にもたらすためには、話された言葉 (gesprochenes Wort) に沿って、図絵と音 (Bild und Ton) とを交互に用いることができるような講演・朗読・展示の空間 (Vortrags- Vorlese- und Vorfahrungsraum) が必要である<sup>36)</sup>。

『ディー・ビューヘライ』でも確認したように『ドイツの図書館』においても、「話された言葉」を重視し、個人による読書ではなく、子どもの朗読を可能にする設備と空間を整えることが重視されている。

下の写真 I は 1940 年に開設したアーヘン市立図書館の子ども貸出室 (Jugendausleihe) を写したものである。『ドイツの図書館』は、これらの建築空間を前述の「目的に沿った図書館建築」であると評して、朗読に適するように「空間を明るく、広々と」している点が特徴であると述べる<sup>37)</sup>。



写真 I<sup>38)</sup> 子ども貸出室 (アーヘン市立図書館)

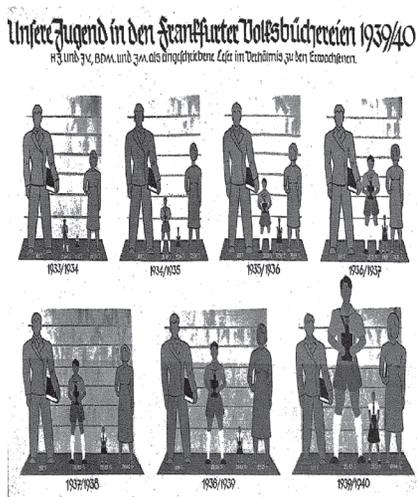
このように、図書館空間を重視する姿勢が、子どもへの朗読といった読書実践と結び付けられている。朗読とそれを可能にする空間を重視するという点で『ドイツの図書館』は、子どもの読書に対する理解に関して、『ディー・ビューヘライ』と通じるものであるといえる。

子どもの読書を行う空間への働きかけは、『ディー・ビューヘライ』においても見出すことができる。たとえば、フランクフルト・アム・マイン市

立民衆図書館の建設に関する報告において、図書館内の子ども読書室の入口（写真Ⅱ）に、以下のような掲示（表Ⅱ）が紹介される。



写真Ⅱ<sup>39)</sup> 子ども読書室入り口



表Ⅱ<sup>40)</sup> 写真Ⅱ内の掲示

掲示のポスターには、「フランクフルトの図書館における我々の子ども」という題目の下、左上の1933～1934年から右下の1939～1940年までの期間での、図書貸出数の比率が、成人男性（各グラフ内左端）、成人女性（各グラフ内右端）、ヒトラー・ユージェント所属の男子（各グラフ内左から二番目）、ヒトラー・ユージェント所属の女子（各グラフ内右から二番目）の四区分に分けて、絵で可視化されている。これによって示されるのは、1933年から1940年まで、一貫して、ヒトラー・ユージェント所属の男子および女子の貸出数が増加していったことである。この掲示を子ども室の入口に掲示することで、ヒトラー・ユージェント所属の子どもの読書が推奨されたのであった<sup>41)</sup>。

図書館における子どもの読書は、単なる娯楽や趣味としては理解されない。プレスラウの図書館職員イレーネ・グレープシュは、子どもの読書に興味以上の役割を見だし、子ども図書館や子ども読書室の場所としての意義を以下のように強調する。

子ども図書館や子ども読書室は、子どもが良書への敬意を学ぶ場所になるべきです。そこで、子どもたちは、書物とは二、三時間をつぶすための単なる娯楽ではなく、はるかに重大な意味をもつことを学ぶのです<sup>42)</sup>。

この重要な意味とは、「書物がドイツ人の全体教育に貢献すること」である<sup>43)</sup>。このように、図書館における子どもの読書は、ドイツ人の全体教育というナチ・イデオロギーに資するための行為として理解された。そしてその理解は、朗読をはじめとした読書方法を効果的にするための図書館建築空間までにも、影響を及ぼすものであった<sup>44)</sup>。当然ながら、そこでは子ども自身の自由な読書は許されていない。子どもが図書を貸出する際にも、大人が注意深く監視する必要性が繰り返し主張されたように<sup>45)</sup>、あくまでもナチ・イデオロギーの範囲内での読書が目指されたのであった。

## 5. 戦時下図書館における子どもの読書

1939年の戦争開始以後の『ディー・ビューヘライ』においても、上の理解は保たれる。『ディー・ビューヘライ』における最初の戦争に関する言及は、戦争開始直後の1939年9月のハイリゲンシュタットの巻頭言になる。彼はそこで、民族の力と精神を図書館が鼓舞することを、戦時の図書館の目標として宣言する<sup>46)</sup>。戦時下の図書館の目標として、戦争という新しい歴史の転換点と問いにかかわる書物を、完全に生活の中に呼び寄せることが『ディー・ビューヘライ』で主張される<sup>47)</sup>。たとえば、前述のグレープシュは、子どもの貸出が著しく増加したことを報告している。とくに、その増加の大部分は戦争関連本からなるものであった<sup>48)</sup>。戦時下という時流を受けて、戦争小説、Uボートに関わる戦争本、第一次世界大戦従軍録といった書物が、10歳から12歳の子どもたちから望まれているという。さらに彼女は、図書館に来る子どもたちが、読書の結果、学校教師を驚かすほどの戦争・軍事にかかわる知識量を身に着けたことを好意的に評価する<sup>49)</sup>。また、併合したズデーテン地方での、ガブロンツ子ども図書館新設の報告においては、以下のように、ヒトラー・ユーゲントとの協力が宣言される。

ヒトラー・ユーゲントの旗が、図書館の訪問者に、重要かつ義務たる課題を思い起こさせなければならない。すなわち、われわれの子どもらに、国民社会主義的な書物を存分に与えることである。子どもは多

読を行うべきではないが、善きものを読まなくてはならない<sup>50)</sup>。

これらの事例に示されるように、図書館は従来のナチ・イデオロギーの宣伝の役割に加えて、戦争遂行・戦意高揚の役割を担うことになる<sup>51)</sup>。しかし、これまで図書館との協力を担ってきたヒトラー・ユーゲントにおいても、1940年以降には疎開の開始、1943年からは空軍補助員への登用を始めとした戦争動員が行われ、全体的な組織力が低下する<sup>52)</sup>。

基本的に月刊であった『デー・ビューヘライ』も、1942年の6-8月号からは合併号を連続させる形で刊行されるようになり、年3~4回のみの刊行となる。戦争前の1938年度で765頁もあった総頁数も著しく減少し、1942年には358頁、1943年は総計328頁に留まった。1942年以降、内容面においても、空襲や紙不足を始めとした図書館の苦境を訴える報告がみられるようになった<sup>53)</sup>。『デー・ビューヘライ』の最終刊行年には、戦争が激化し各地の図書館も空襲に見舞われ続ける中、憩いの場所、として図書館を開館にする意義が唱えられるが<sup>54)</sup>、1944年の10-12月号をもって廃刊されることとなった。

## 6. 結語的考察

ナチ時代の図書館において、子どもの読書に対してどのような意義が見出され、どのような読書が行われたのかを明らかにすることが本稿の目的であった。これまでの行論を踏まえて、この問いに答えてゆきたい。

子どもの読書に対する意義づけとして、「教育的意味での成熟」を度外視した上で、「体験」が重視されていたことが判明した。では、この「体験」の意味内容は如何なるものであるのか。この意味内容は、実際に行われた読書活動と合わせて鑑みることで浮かび上がってくる。

子どもの読書にかかわる図書館活動においては、集団での読書・朗読が重視されていた。とくに、朗読を始めとした図書館とヒトラー・ユーゲントとの協力が盛んに展開されていたことが判明した。また、図書館における読書空間が重視されていた。図書館空間で重視されるのは、「書かれた言葉」を「話された言葉」に変換し、「図絵と音」(Bild und Ton)で伝達することを可能にする、「講演・朗読・展示の空間」であった。図書館とヒトラー・ユーゲントが協力し、「書かれた言葉」を「話された言葉」に変換する「朗読」が、積極的に展開されていたのであった。そして、これらの朗読会の

朗読本として、ナチ党員の著作や第一次世界大戦の著作を初めとした、ナチ・イデオロギーに親和的な図書が読まれていた。

上の諸点を踏まえると、子どもの読書の意義としての「体験」とは、集団で親ナチ的な図書を読み、その内容を集団で追体験することを意味するものであったといえる。それゆえに、個人による読書は推奨されない。また、これらの集団での朗読活動が、ヒトラー・ユーゲントとの協力の上に成り立っていた点も特徴的である。ヒトラー・ユーゲントの教育活動が、「生活・体験を中心にして、畏敬の念、忠誠、犠牲的精神を基本要素」として展開するものであったという生田の指摘<sup>55)</sup>に鑑みれば、図書館とヒトラー・ユーゲントとの協力による集団での読書活動の展開は、「体験」を基軸にしたナチズムの教化を試みたものであったといえる。

本稿では図書館における子どもの読書の意義とその読書活動の実態に着目したが、その結果、これまで書誌的考察に傾きがちであった先行研究が検討していなかった側面を照らしえたと思われる。ナチスに親和的な図書の読書が奨励されていたのと同時に、読書方法に関しても、個人の読書ではなくヒトラー・ユーゲントをはじめとした集団による読書・朗読に重きが置かれ、図書の内容の追体験を経ることで、ナチ・イデオロギーを子どもに教化することが目論まれたのであった。故に戦時においても、図書館において目指されたのは、戦争関連図書の読書による戦意高揚であった。そして、集団での朗読を可能にさせる広々とした空間が、図書館建築において重視されたのであった。本稿が明らかにしたように、子どもの読書に関しては「何を読むのか」という内容面の統制だけでなく、「どのように読むのか」という読書方法、そして読書空間も、ナチ時代の図書館において統制・操作の対象とされていたのであった。しかし、本稿の分析はあくまで図書館側による、子どもの読書への意義づけと子どもの読書にかかわる図書館活動を考察するものであった。そのため、子ども本人をはじめとした図書館利用者がこれらの取り組みをどのように受容したのかについては明らかでない。この点は今後の研究の課題である。

## 【付記】

本稿は、教育史学会第61回大会(2017年10月8日)での口頭発表「ナチス・ドイツ下の図書館における子どもの読書の意義 『図書館』誌の分析を中心に」の発表原稿に大幅な修正を加えたものである。また本研究は、東京大

学ドイツ・ヨーロッパ研究センター ZDS-MA 奨学助成金を受けた研究成果の一部である。

## 注

- 1) 本稿では、ドイツ語の *Jugend, Kinder* を「子ども」として訳出した。
- 2) 19世紀以降、とくにベンヤミン・プロイスカーによるグローセンハイン市への公共図書館設立（1828年）を嚆矢として、ドイツでは公共図書館の設立が進んだ。河井弘志『ドイツの公共図書館思想史』京都大学図書館情報学研究会、2008、pp.25-31。これらの公共図書館は、主に市民層への読書の提供を目的とするものであった。Vgl. Jochum, Uwe. *Kleine Bibliotheksgeschichte*. Stuttgart, Reclam, 1999, S. 147-148.
- 3) Vodosek, Peter. „Bibliotheken als Institutionen der Literaturvermittlung, “ in; Fischer, Ernst. und Füssel, Stephan (Hrsg.) . *Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert: Die Weimarer Republik 1918-1933. Teil 1*. München, K. G. Saur, 2007, S. 197-222.
- 4) Ladwig, Sandra. „Die Diskussion um die Kinder- und Jugendliteratur in der Weimarer Republik, “ in: Hopster, Norbert (Hrsg.) . *Die Kinder- und Jugendliteratur in der Zeit der Weimarer Republik. Teil 2*. Frankfurt am Main, Peter Lang, 2012, S. 556.
- 5) 古典的な研究として、Aley, Peter. *Jugendliteratur im Dritten Reich*, Hamburg, Verlag für Buchmarkt-Forschung, 1967; また、ナチ時代の読書について、書誌的考察に基づく近年の研究として、Adam, Christian. *Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich*, Frankfurt am Main, Fischer, 2013.
- 6) た と え ば Wilcke, Gudrun. *Die Kinder- und Jugendliteratur des Nationalsozialismus als Instrument ideologischer Beeinflussung*, Berlin, Peter Lang, 2005, S. 15-16.
- 7) Hopster, Norbert. „Lesen und jugendlicher Leser in Deutschland unter dem Nationalsozialismus, “ *Wirkendes Wort*. Vol.37, 1987, S. 216-227; Hopster, Norbert. und Nassen, Ulrich. *Literatur und Erziehung im Nationalsozialismus*, München, Ferdinand Schöningh, 1983, S. 71.
- 8) 代表的なものとして以下を参照。ヴォルフガング・タウアー、ペーター・フォドゼグ共著、河井弘志訳『ドイツの公共図書館運動 興隆・挫折・再起の歴史』日本図書館協会、1992、p.164; Andrae, Friedrich. *Volksbücherei und Nationalsozialismus*, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1970, S. 11-13; Boese, Engelbrecht. *Das Öffentliche Bibliothekswesen im Dritten Reich*, Bad Honnef, Bock&Herchen, 1987, S. 133ff.
- 9) Dankert, Birgit. „Die Kinder- und Jugendbibliotheken während der Zeit des

- Nationalsozialismus, “ *Buch und Bibliothek*. Vol.40, 1988, S. 946-954; Ders. „Die Kinder- und Jugendbibliotheken zur Zeit des Nationalsozialismus, “ in: Vodosek, Peter. und Komorowski, Manfred. *Bibliotheken während des Nationalsozialismus*. Teil I. Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1992, S. 164-197.
- 10) Vgl. Dankert, Birgit. *a.a.O.*, 1988, S. 952. また、図書館とヒトラー・ユースメントとの協力活動を指摘するものとして、以下を参照。Stieg, Margaret. *Public Libraries in Nazi Germany*, Tuscaloosa and London, The University of Alabama Press, 1992, p. 165-170.
- 11) ウェイン・ウィーガン著、川崎良孝・川崎佳代子・福井佑介訳『メインストリートの公立図書館 コミュニティの場・読書のスペース・1876-1956年』京都図書館情報学研究会, 2011; 久野和子「新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」("Library as Place") 研究」『図書館界』Vol66, No.4, 2014, p.268-285. 「場としての図書館」研究は、学際的な研究手法により、図書館における読書（どのように読書が行われたのか）、あるいは閲覧室をはじめとした図書館空間の意義について着目する研究の潮流である。
- 12) Vgl. Barbian, Jan-Pieter. *Literaturpolitik im NS-Staat. Von der »Gleichschaltung« bis zum Ruin*. Frankfurt am Main, Fischer, 2010, S. 348-349.
- 13) Schuster, Wilhelm. „Zum Abschied, “ *Bücherei und Bildungspflege*. Vol.13, 1933, S. 330.
- 14) Stieg, Margaret. *a.a.O.*, p.51-55; Koch, Christine. *Das Bibliothekswesen im Nationalsozialismus: Eine Forschungsstandanalyse*. Marburg, Tectum Verlag, 2003, S. 23.
- 15) 松井健人「第三帝国における図書館と教養—帝国民衆図書館局長官フランツ・シュリーヴァーの図書館論を手がかりに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』Vol.56, 2017, p.457-464; 同上「ナチ時代における公共図書館の使命の一側面—ヴィルヘルム・シュスターの公共図書館論に着目して—」『研究室紀要』（東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室）Vol.42, 2016, p.193-203.
- 16) Koch, Christine. *a.a.O.*, S. 7-10.
- 17) Wilkens, Erik. „Vorlesestunden für die Hitler Jugend, “ *Die Bücherei*. Jg.3, 1936, S. 354.
- 18) Ebenda. なお、この「体験」の意味内容については後の結語的考察において扱う。
- 19) Engelhardt, Wolfgang. „Hitlerjugend in der Jugendbücherei, “ *Die Bücherei*. Jg.4, 1937, S. 175.
- 20) Vgl. Abel, Hinrich. „Hitler-Jugend und öffentliche Bücherei, “ *Die Bücherei*. Jg.4, 1937, S. 42.
- 21) 一見して明らかであるが、このようなカテゴリー区分自体が、ナチ・イデオロギーの影響下の元で成立した区分であるといえる。ナチズムに迎合する図書のカテゴリー区分の導入は、各地の図書館員がナチスへの自発的服従として

- 行ったものでもあった。戦後の図書館員によるこの点の指摘として、以下を参照。Vgl. Bergtel-Schleif, Lotte. „Möglichkeiten volksbibliothekarischer Arbeit unter dem Nationalsozialismus, “ *Der Volksbibliothekar*. Jg.1, 1947, S.193-207.
- 22) Kock, Richard. „Bericht über die Zusammenarbeit mit der Städtischen Volksbücherei Schneidemühl mit der HJ, “ *Die Bücherei*. Jg.4, 1937, S. 495.
- 23) Vgl. Ebenda, S. 494
- 24) Vgl. Lehwesick, Frich. „Die Rolle der Jugendschriftenfrage in der neuen Lehrerbildung, “ *Die Bücherei*. Jg.5, 1938, S. 260.
- 25) Helke, Fritz. „Hitlerjugend und Buch, “ *Die Bücherei*. Jg.3, 1936, S. 341-343.
- 26) Heiligenstaedt, Fritz. „Die Schülerbücherei im Rahmen nationalsozialistischer Erziehungsarbeit, “ *Die Bücherei*. Jg.5, 1938, S. 406.
- 27) 同様の言説として、Fiehler, Karl. „Die Gemeinden und das Buch, “ *Die Bücherei*. Jg. 6, 1939, S. 6 など多数。
- 28) Kock, Richard. a.a.O., S. 489
- 29) 以下は Wilkens, Erik. a.a.O , S. 353 より転載。
- 30) カール・リッツマン (Karl Litzmann, 1850-1936) は第一次世界大戦で将校として活躍し、ナチ党に入党した人物。
- 31) ハンス・フランク (Hans Franck, 1879-1964) は 1934 年に『ヒトラー 一つの民衆・子どもの書物 (*Hitler. Ein Volks- und Jugendbuch*)』を著すなど、親ナチ作家としてナチ時代活躍した。
- 32) ハンス・グリム (Hans Grimm, 1875-1959) は作家であり、自身のイギリス領南アフリカ植民地での生活をもとに執筆した 1929 年の『土地なき民 (*Volk ohne Raum*)』がナチスによって称揚された。
- 33) ホッテントット (Hottentott) は、ドイツ領南西アフリカの地名。20 世紀初頭にドイツ軍による先住民虐殺が行われた。
- 34) Ebenda.
- 35) Vgl. Reichsstelle für das Volksbüchereiwesen (Hrsg.) . *Deutsche Büchereien*. Leipzig, Verlag Einkaufshaus für Büchereien GmbH, 1943, S. i. なお、1 頁が始まる前の i-xi 頁に関しては、著書そのものにはページ数の記載がないが、本稿では便宜のためページ数を割りあてた。
- 36) Ebenda, S. ii.
- 37) Ebenda, S. iii.
- 38) Ebenda, S. 2.
- 39) Beer, Johannes. „Die Aufbau der Städtischen Volksbüchereien in Frankfurt/M. als Beispiel eines großstädtischen Volksbüchereibetriebes, “ *Die Bücherei*. Jg.8, 1941, S. 21.
- 40) Ebenda, S. 22.
- 41) なお、表Ⅲのグラフはこれまでの先行研究では、図書館とヒトラー・ユーゲントとの協力を示すグラフとして指摘されてきた。しかし、当のこのグラフが

実際の図書館において子ども室入口に掲示され、子どもの読書を示唆する掲示として機能していた、という図書館空間との関わりに関しては述べられていない。Vgl. Dankert, Birgit. a.a.O., 1992, S. 169; Stieg, Margaret. a.a.O., 1992, p.167.

- 42) Graebisch, Irene. „Jugendbücherei und Kinderlesehalle, “ *Die Bücherei*. Jg.3, 1936, S. 361.
- 43) Ebenda, S. 360-361.
- 44) そもそも、図書館閲覧室に、ヒトラーの肖像画が掲げられている場合も多々あった。Vgl. Reichsstelle für das Volksbüchereiwesen (Hrsg.) , a.a.O., S. 34, 58.
- 45) Vgl. Graebisch, Irene. a.a.O., S. 365.
- 46) Heiligenstaedt, Fritz. Vorwort, *Die Bücherei*. Jg.6, 1939, S. 499.
- 47) Payr, Bernhard. „50 wesentliche Bücher des Jahres 1939 für Volksbüchereien, “ *Die Bücherei*. Jg.7, 1940, S. 77.
- 48) Graebisch, Irene. „Berichte aus der Praxis der Jugendausleihe im Kriege, “ *Die Bücherei*. Jg.7, 1940, S. 274.
- 49) Ebenda, S. 275.
- 50) Streit, Julius. „Die neue Gablonzer Jugendbücherei, “ *Die Bücherei*. Jg.8, 1941, S. 110.
- 51) たとえば, Bastian, Liselotte. „Hitler-Jugend und Volksbücherei, “ *Die Bücherei*. Jg. 9, 1942, S. 63.
- 52) 原田一美『ナチ独裁下の子どもたち ヒトラー・ユーゲント体制』講談社, 1999, p.196-226.
- 53) Vgl. Dähnhardt, Heinz. „Die öffentlichen Büchereien im totalen Kriege der Nation, “ *Die Bücherei*. Jg.10, 1943, S. 91-98.
- 54) Dähnhardt, Heinz. „Warum bleiben *Die Büchereien* geöffnet ?, “ *Die Bücherei*. Jg.11, 1944, S. 302. シュテューグによれば、戦争が激化するにつれて、従来の図書館統制は崩壊し、統制を失ったと理解される。Vgl. Stieg, Margaret. “The Second World War and the Public Libraries of Nazi Germany,” *Journal of Contemporary History*. Vol.27, No.1, 1992, pp. 23-40.
- 55) 生田周二「ヒトラー・ユーゲントの学校外における教育的役割」『日本社会教育学会紀要』Vol.19, 1983, p. 36.